

G.Evans における情報概念の検討を通して

福 田 敦 史

はじめに

世界に関して私たちが有している知識、あるいは、思考といったものは、果たして本当に世界についての知識や思考という身分を持っているのだろうか。言い換えるならば、私たちが世界に関して有していると思われる知識や思考は、正当に世界に到達していると思わせるのだろうか。日常における表現でこの問題を言い直すならば、例えば、私が、書斎の窓の外を見て「尾の青い鳥が、庭の木の枝にとまっている」と発言したとき、私のこの発言内容（さらに「日常の言い方」で言えば「私が心の中で思っていること」とでもなろうか）が、確かに、この私が住むこの世界において生起している出来事についての言明であるとみなすことができ、単に「私の心の中」だけで空虚に（？）生じていることではない、とみなすことができるだろうか、という問題である。

エヴァンズが、彼の *The Varieties of Reference* のなかで取り組んでいる問題は、まさにこの問題である。そして、エヴァンズは、この問題に関わる指示の理論について、単称名 (singular term) に関する非記述的な直接的意義 (フレーゲ的意義) というものを打ち出している。単称思想に関するエヴァンズの議論の最大の特徴として、ラッセル原理 (あるいは対象依存性) を挙げることができるが、その際の、対象への依存性を担うものが、情報・情報状態というものである。本論文では、エヴァンズの情報概念の検討を通して、そこから見えてくる、世界についての私たちの経験の在り方について考えてみたい。次からの二つの節で、ごく簡単にエヴァンズにおける単称思想についての導入をし、続く第三節で、エヴァンズにおける情報概念の「曖昧さ」を取り上げながら、この情報という概念を通した私たちの経験の在り方について考えてみる。そして最後の第四節では、エヴァンズが描く描像から引き出すことができる、私たちの経験の在り方についてのあら

たな捉え方についてふれてみようと思う。

§ 1 直示に基づく思想

「私たちが持つ知識 (knowledge) や思想 (thought) がほんとうに世界についてのものになっているのだろうか」という問題を考える際に、しばしばその検討の素材として扱われてきたものは、単称思想 (singular thought) と呼ばれるものである。単称思想とは「特定の同定可能な個体についての思想¹⁾」のことであり、ごくごく簡単に言ってしまうと、あるひとつのもの (個体 individual; 個別者 particular) についての思想のことである。

ところで、この「あるひとつのもの」を取り出す仕方には、大きく3種に区別することができる。まず一つめは、確定記述を含むた記述による同定であり、例えば「この教室で最も足の速い人がリレーの選手である」というものである。二つめの同定の種類は、直示 (demonstrative) に基づく同定であり、これは「あれ」や「これ」といった直示詞を用いたもののことを言い、例えば「この生徒がリレーの選手である」といったものになる。そして最後は、固有名 (proper name) を用いた表現であり、これは例えば「山田花子さんがリレーの選手である」というものである。

どの同定の方法であっても、ある一人の生徒 (個体) を指示している、という点に関しては同様なのだが、それぞれのあいだには違いがある (ように思われる)。本論文では、固有名に関する議論は取り上げないため²⁾、記述による同定と直示による同定との区別を指摘しておこう。

記述による同定の場合、その表現の発話者は、具体的にどの生徒が教室で一番足が速いのかを分かっているとしても、その文を理解しているとみなすことができる。これに対して、直示による同定の場合、例えば、直示詞「この」で指された「この生徒」が、実際に教室の中のどの生徒を指示しているのかを分かっていると、先ほどの表現を理解しているとはみなせないのである。したがって、このような直示詞をもちいた直示に基づく思想は、主体が獲得している思想が客観的实在の世界に届いているのか、という問題を考えるうえで、しばしば中心的な主題のひ

とつとして取り上げられるものなのである³⁾。

§ 2 単称思想と情報

それでは、エヴァンズにおける直示に基づく思想について簡単に見ておくことにしよう。エヴァンズにとっては、直示の状況において、最も典型的に、私たち主体が客観的な世界についての直接的な思想を獲得している場面が現われていると考えられている。そのため、これらの思想にとっては、ラッセル原理 (Russell's Principle) を満たしていることが決定的に重要なことなのである。思想がラッセル的であるとは、エヴァンズによれば次のようなことである。

もし、思想がそれについてであるところの対象ないし諸対象が欠如している場合には、断じて存在することのないような類いのものである場合、思想はラッセル的である⁴⁾。

もうひとつ、マクダウェルからもひいておこう。

単称思想とは、当該の対象ないし諸対象が存在しない場合には、思考されたり表現されたりすることができない思想のことである。したがって、人がある類いの文を発話した際に、その発話において、表示対象 (denotation) を欠く単称名をその文が含んでいる場合、人は、いっさい思想を表現したことにはならない。その結果として、真でもなければ偽でもない⁵⁾。

対象が存在しない場合には、単称思想は思想たりえない。たとえ発話した当人は、何か意味のあることを表現しているつもりであつても、対象がないのであれば、あるいは、対象を適切に捉えているのでなければ、それは実のところ、何ら意味のあるものではない。例えば、二つの鉄球が天井からぶらさがり、どちらがどちらなのか見分けのつかないぐらい非常に高速で動き続けているものとしよう。この状況で、私が「あの鉄球は、非常に高速で動いている」と発話したもの

とする。ここでの私の発話は十分有意義なものであると考える人も少なくないであろう。しかしながら、エヴァンズにおいては、これは思想ではなく、したがって有意義なものではない。なぜなら、二つの鉄球は見分けがつかないほど高速で動いているのであり、そして実際に私は、さきほどの「あの鉄球」という表現で、どちらかの鉄球を同定できているわけではないからである。

常識的な直感に反するかのようなこのような帰結をもたらすほど、エヴァンズにおいては、ラッセル原理が強くとられるのだが、その理由は、私たちの思想が、正当に、客観的世界に到達しているとみなせるためには、客観的世界のうちで個別者として存在している個体に到達していなければならないと考えられているからである。そして、この世界での個体の存在の仕方は、時空的なものであり、同じ時空位置に二つ以上のものが存在することはあり得ない以上、どんなに判別が困難な状況にあっても、個体は、ある場所と時間をしめる仕方で、必ず一個のものとして存在しているからなのである。

そして、このような思想を獲得する際に、私たちが基づいているものが、世界のありようについての情報であり、私たちの情報状態なのである。私たちは、世界内の対象を正当に同定することで思想を獲得するわけだが、世界における対象を捉えるその捉え方 conception を有することになるのは、私たち主体が対象から情報を受け取っているからなのである⁶⁾。

まだ紹介すべき論点は残されてはいるが、概要としては以上で終えよう。次節から、エヴァンズにおける情報概念についてもう少し詳しく見ていくが、その際に、残した論点を取り上げていくことになるはずである。

§ 3 Evans における「情報」概念のとらえにくさ

エヴァンズが展開している対象－依存的 (object-dependent) な単称思想に関わる考察は、いろいろと活発な議論の対象になっているが、その一方で、彼の「情報」という概念に関しては、積極的に取り上げて論じられることがあまり多くない。その理由のひとつは、彼の提示している情報概念が、一種エヴァンズ独特なものであるにもかかわらず、従来の情報概念との相違を明確にされずに議論が

進展していくことにあると思われる。この節では、エヴァンズの情報概念において、誤解されかねない点や注意すべき点をいくつか指摘し、それについてのコメントをつけていこう。

3-1 ギブソンとの関連

まずはギブソン (J. J. Gibson) との関連性についてである。エヴァンズは「情報」についての考察を始めるとき、註においてギブソンの名を示しているのだが⁷⁾、ギブソンの情報概念の影響を、エヴァンズの議論のなかにそのまま見い出すことは難しい。というよりも、ギブソンにおける情報概念とエヴァンズにおける情報概念とはだいぶ異なるものと言った方が的確であろう。例えば、エヴァンズにおいては、情報とは誤情報 (misinformation) も含めたものであるとされており⁸⁾、さらに、情報は歪められたり (garbled)⁹⁾、衰微したり (decay) することがあるものとみなされている¹⁰⁾。またさらには「何ものについてでもない情報状態というものも取り上げられる¹¹⁾。こうしたことは、ギブソンの情報概念とは、基本的に相容れないものであると言うことができるであろう¹²⁾。

しかしながら、この点に関しては、エヴァンズが、ギブソンとその発想を共にしている事柄は、もっと広く一般的なものののだ、と見なした方が適切であろう。エヴァンズがその考察の冒頭でギブソンをひいているときに念頭にあることは、おそらく、単に情報という言葉を用いているか否かということにあるのではなく、主体が「しかじかの内容をもつ情報状態にある (being in an informational state with such-and-such content)」という事の指摘にある。すなわち、主体はすでにしてある環境のなかに投げ込まれているということの指摘であり、そこにおいて、経験をしたり思想を獲得したり行為へとうながされたりするような環境のうちに主体は存在している、ということの指摘である¹³⁾。そして、この主体が投げ込まれている環境というものが、エヴァンズにおいては、情報状態であり、情報リンク (information link) というものである、ということなのである。

3-2 知覚・記憶・証言

次に取り上げる論点は、エヴァンズが情報という概念を、知覚の場面はもちろん、記憶の場合にも、そしてコミュニケーションの場面でも用いているということである。

人が何かを知覚しているとき、彼は世界についての情報を受け取っている(あるいは、より適切には、集めている)。コミュニケーションを通して、人は、この情報を他の人に伝達するだろう。そして、どのような小さなものでも、あるとき有している情報は、後の時までその人によって保持されるであろう。人々は、簡単に言って、とりもなおさず、情報の収集役 (gatherers) であり、伝達役 (transmitters) であり、そして貯蔵役 (storers) なのである¹⁴⁾。

一般的には、コミュニケーションの場面や、記憶が語られる場面で、「情報」という表現が用いられることに不思議はないだろう。しかし、哲学の領域においては、例えば、知覚が論じられる場面、記憶が論じられる場面、コミュニケーション (証言 testimony) が論じられる場面のそれぞれで、個別に情報という言葉が語られることはあっても、これら認識論的主題の三つの領域のすべてで同様に語られるということは、比較的珍しいことである。そして、このことは、エヴァンズにおける情報概念の懐の深さとなっていると考えることもできるが、同時に、その曖昧さを産むことの要因にもなっていると言ってよい。

3-2-1 命題的・非命題的

この曖昧さの一つめは、エヴァンズの念頭にあるものが、言語的に表現されたような概念的な情報であるのか、それとも、いわば前言語的な、概念化される以前の情報というものを考えているのかが明確ではない、ということである。例えば、人から人へと情報が伝えられていく場合、その伝達方法としてまず思いつくのは、言語による伝達・コミュニケーションであろう。そこでの情報は言語で

表現されたものであり、反対に、言語で表現されていないものは、他者とのコミュニケーションにおいて伝達することは非常に困難である¹⁵⁾。

一方、知覚の場面で私たちが周囲の環境から受け取っている情報について考えてみると、私たちは、まだ言語化されていない、あるいは、言語化の可能性を超えているとでも言いたくなるような情報を受け取っているように思われる。例えば、私が新緑の季節にピクニックに行き、そこでの美しい風景を眺めている際、わたしの「木々の緑がほんとうにきれいだ」という発話では、とてもではないが、私が知覚している際の状態を完全に言い尽くしているとはいいがたい。このとき、私たちは、言葉では言い尽くすことのできないようなものを知覚しているように思われる¹⁶⁾。

エヴァンズが自分の議論を展開していくときには、彼の中で、概念的で言語的なものとしての情報（命題的な情報）を念頭に置いているときと、知覚情報などの前－言語的なもの（非－命題的な情報）を念頭においているときがあるものと思われる。エヴァンズのテキストを読む側としては、その都度、どちらの情報概念を主として念頭に置いているのか慎重に読む必要があるだろう。

3-2-2 記憶の区別と情報の区別

エヴァンズが認識論的領域のすべてで、同様に情報という表現を用いることに由来する曖昧さの二つめは、いまの一つめの曖昧さと関連性がある。それは記憶の場面で情報について語る際に現われるものである。

エヴァンズは、記憶において情報が保持されると考えている。それでは、ここで保持されているとされる情報とは、命題的なものなのであろうか、それとも、非－命題的なものなのであろうか。しかし、この問いに答えるためには「記憶」ということで何を考えればよいのか気をつけなければならない。

「記憶」と一言でいっても、どのような観点から扱うかによって、記憶をいくつかの種類に分けることが可能である。ここでの議論に直接関わる区分は、言語的に表現された記憶（心理学などでは宣言的記憶 *declarative memory* と呼ぶことがある）のうち、命題や、命題で表現された知識を覚えているような記憶（典型

的には、歴史的な事件の内容を覚えている、など）と、もうひとつは、自分自身の過去の体験をいま思い出すような記憶、すなわち想起との区分である¹⁷⁾。ここでは、前者のようなものを「知識記憶」と呼び、後者のようなものを想起と呼んでおくことにしよう。

さて、知識記憶の例として「織田信長が1560年に桶狭間で今川義元を破った」というものを取りあげよう。この場合、私は歴史の教科書で習ったのか、あるいは何かの読み物で知ったのか、それとも、誰かから教わったのか、今となつては定かではないが、ある時、「織田信長が1560年に桶狭間で今川義元を破った」という内容を知識として獲得したわけである。そして、この知識記憶の内容を、これまで私は保持してきたのであり、だからこそ、今、私はこの知識記憶に基づいて、この歴史的知識を知っているのであるといえよう。すなわち、この知識記憶で保持されてきたものは、すでに言語化されたもの、すでに命題化されたものである。

次に、想起の例として、私が今、以前、登山に行った時のことを思い出しているとしよう。私は、木々に囲まれた山道や、岩山のごつごつした感じ、あるいは突然のにわか雨で困ったことなどを思い出しているものとしよう。

ところで、この想起の場合、私が保持している情報とはどういうものであろうか。例えば、誰かが、にわか雨の際に使った新しい雨具の使い心地はどうだったか私に尋ねたものとしよう。私は、雨具を着て、どこか雨宿りができる場所を探しながら少し急ぎ気味で山道を歩いていた。その時、けっこう汗をかいたはずだったのにもかかわらず、それほど不快な感じを抱かなかったことを思い出し、「さすがに最近の雨具は性能がいいね、汗で蒸れて不快になることはなかったよ」と答えたものとする。

今、私が思い出して発話した内容は、言語で表現され、そして他者に伝えているという点からみても、言語化されたもの、命題化されたものとみなすことができるであろう。

けれども注意しよう。現在思い出されている想起内容は、過去の体験の時点において、すでに言語化されていたものなのだろうか。つまり、過去の登山の時点において、判断がなされ、命題化されたものをすでに獲得していたのであろうか。

おそらくそうではないであろう。私は友人から尋ねられるまでは、雨具の使い心地について明確な考えはもってはいなかった。むしろ、想起している今、私は初めて、雨具についての判断を下し、雨具の使い心地についての思想を持ったのである。そうだとすると、想起の場合、過去の時点から現在の時点まで、保持されているものは、言語化される前のもの、非一命題的なものとみなすことができるであろう¹⁸⁾。

議論のために単純化して述べるならば、知識記憶の場合に保持されるものは、言語的・命題的な情報であり、想起の場合に保持されるものは、前一言語的・非一命題的な情報なのである¹⁹⁾。このことに関しても、先に指摘したことと同様、エヴァンズが論じるときに、どのような記憶概念が、そして、どちらの情報が念頭に置かれているのかについて、注意が必要である。

3-2-3 非二元的なものとしての見え *seemings*

しかし、その上で、強調すべきことは、これらの情報の多様性があるにもかかわらず、それでもエヴァンズが情報という一語で扱っている事実は決して無視してよいわけではない、ということである。たとえ、ある観点からは、情報を命題的なものと非一命題的なものとに区別することが有益であるとしても、私たちが経験し判断するときに、命題的であれ非一命題的であれ、情報状態に基づいて行っている、という観点からは、情報はひとつの概念として扱われるべきものである。

むしろエヴァンズは、情報における以上のような差異を自覚したうえで、情報というひとつの概念で考察を進めることの必要性を訴えているのである。このことは、次の二点からも伺うことができる。一つめは、感覚(*sensation*)と信念(*belief*)という伝統的な認識論的概念に代えて、情報概念を提示する理由を述べているところである。

伝統的認識論者は、こうした平凡なことから〔訳者註：知覚で情報を集め、記憶で情報を保持し、コミュニケーションで情報を伝達するということ〕を感覚 (sensation) と信念 (belief) という概念、という観点から捉え直す。どちらの情報－獲得、情報－交流の場合であっても、主体は、それ自体としては客観的内容を欠く所与を受けとり、(非常にあやふやな) 推論によって、そのうちに適切な客観的意義を読み込んでいくとみなされる。そして、証言の場合には、推論は情報提供者の信念を含む中間段階を経て、世界についての情報へと進むとみなされている。ここは、最近このような再解釈が受けた批判を説明したり展開する場所ではない。ただし、少なくとも、知覚に関して言うならば、伝統的な捉え方は、事態をどうしようもないほどに間違っていると、現在ではひろく受けとめられている。意識的で理性を行使する主体にとって所与とみなせる出来事は、「見え (seemings)」だけである。そしてこの出来事は、つまり、すでに客観的意義をもつ (と思われる) ものであり、抵抗はできるものの必然的な、行為に影響する傾向性をすでにもつものなのである²⁰⁾。

伝統的認識論においては、主体は感覚所与 (sense-data) のような感覚をまず受け取り、それから推論などを経ることに基づいて、客観的世界についての信念を形成する、とみなされる。しかし、エヴァンズにとってこのような伝統的図式は受け入れられるものではない。主体は、客観的世界から中立なデータを受け取っているのではなく、すでにして、ある種の客観的意義が染み込んだものを受け取っているのである。こうした観点からは、主体がすでに投げ込まれている情報状態というものを、命題的なものと非－命題的なものとに区別することは、議論を進めるうえで時には必然で、かつ、必要なことであるとしても、注意して取り組まなければならないことである。

もう一つは、上で述べたことを、伝統的な証言についての考察にも適用する必要があると述べるところに付された注の箇所である。

証言と感覚とのあいだの類似点 (parallel) は擁護が必要だと私は承知している。そして、もちろん、とりわけ、情報の種類に関する重要な違いというものはあるのだが (感覚は非一概念的情報を産出し、一方、言語は概念的情報を具現化する)²¹⁾。

エヴァンズはしばしば、概念化された経験内容としての概念的内容 (conceptual content) と区別したものとしての、概念化される以前の非一概念的の内容 (non-conceptual content) についての理論を提示した哲学者とみなされている²²⁾。この事実に対する異論はまったくないのだが、しかしながら、エヴァンズ自身の根本的意図として、情報内容における違いはあるものの、そのこと以上に、われわれ人間の認知システムのなかで共通に取り扱うことができるものとしての情報というものを提示している、ということは忘れてはならないであろう。

3-3 自然的・自然因果的

次に、情報に関する自然主義的傾向を念頭においた論点に触れよう。昨今の哲学のさまざまな分野における自然主義化、自然主義的傾向からすると、情報という表現が意味するものとして、自然主義的なものを考える人がいるかもしれない。しかし、エヴァンズにおける情報、あるいは情報リンクというものは、単に自然的因果的なものなのでは決してない。

確かに、エヴァンズには、次のように述べているところがある。

「信念 (belief)」という表現はずっと洗練された認知状態のためにとっておくのがよいだろう。信念は、「判断 (judgement)」という概念と結びつけられているし (さらに、私の考えでは判断という語で定義される)、さらに、「理性 (reason)」という概念とも結びつけられているものである。情報システムの働きは、より原始的 (primitive) なものである。それらのうちのふたつ [訳者註：知覚と記憶] については、結局、私たちは動物たちと共有しているものであり、他人から情報を受け取るメカニズム [コミュニケーションのシステ

ム] が、人間の知的発達的作用過程において、洗練された概念が適用可能になるのに先立つ時点で、すでに働いていると悟らなければ、そうしたメカニズムを適切に理解できるとは思えない²³⁾。

この箇所からは、幼児や動物、あるいは、さらに原始的な生物とも共有しているかもしれないような、原始的で自然的なものとして、エヴァンズは情報をとらえているかのように読めるかもしれない。

しかし、他の箇所を読む限りでは、エヴァンズが、人間の認知システムのなかで機能している情報と、ある動物種の認知システムで機能している情報とが同じものだと考えているとはみなせない。人間に、情報を収集したり、保持したりするシステムがあり、これと同様の機能を果たすシステムを動物は有していて、そのシステムにおいては、その動物種にとっての情報が収集され保持されている、と考えているのである。したがって、ある動物種と、経験主体としての人間の両者にとって概念中立的な情報が自然的世界のうちにあり、この中立的な情報に基づいて判断し経験している、とエヴァンズが考えているわけではない。この点に関しては、マクダウェルが（エヴァンズの所論を「所与の神話」の一形態として批判する文脈ではあるけれども）次のように正しく指摘するとおりである。

しかし彼は経験というものを、情報システムの働きによって自発性とは独立に算出される知覚的情報状態と同一視して考えているわけではない。それどころか彼は、非概念的内容をもつ知覚的情報状態が「それ自体でただちに、知覚的な経験、すなわち意識的主体の状態であるのではない」と主張しているのである。エヴァンズによれば、知覚的な情報システムのある状態が経験とみなされるのは、その非概念的内容が「思考・概念適用・推論のシステムへの入力」として利用できる場合だけである。つまり、自発性の能力によって、すなわち、経験判断をその知覚状態に基づいて合理的におこなったり差し控えたりできる能力によって、その非概念的内容が利用可能な場合だけなのである。したがって、非概念的な情報状態が、自発性の能力を欠く生き物に備わる情報システムの知覚的要素によって産出される場合、それは知覚経

験とはみなされない²⁴⁾。

3-4 対象がどれかを教えてくれる情報は含まない

最後に取り上げる論点は、対象についての情報に基づいて、適切に根拠付けられることにより、思想はラッセル原理をみたしているとするエヴァンズの考えからすると、意外に思われるかもしれない。それは、情報状態の内容からは、対象の特定化はすることができない、言い換えると、情報内容には対象を特定するような情報は含まれてはいない、とエヴァンズが考えているという点である。このことを示すために、エヴァンズは、情報がある対象についてのものである、ということと、写真がある対象についてのものである、ということとの類似性を述べて説明をしている。

写真が対象について (of) のものである、ということの意味するところは次の通りである。あるメカニズムが、ある情報内容を有するものを産出する。さしあたり、この内容は、ひとつかそれ以上の変項（変項の数は写真の中の対象の数に対応する）をもつ開放文によって中立的に特定できると私はみなす。したがって、例えば、私たちが、黄色い正方形の上の赤い球についての写真についてみると、その写真の内容は、次のような開放文によって表現することができる。

赤い (x) & 球 (x) & 黄色い (y) & 正方形 (y) & のうえにある (x, y)

[……] 写真がある対象ないし諸対象についてのものであるということが意味するところを、その内容の特定は、その対象ないし諸対象に言及しなければならない、ということを前提せずに説明した、ということに注意せよ²⁵⁾。

エヴァンズによる開放文の例で考えてみると、この写真には、あるものが赤く、そしてそのものが球である、ということ、そして、あるものが黄色くて、そして

そのものが正方形である、といった情報は含まれており、そして、それは対象についての情報でもあるわけだが、その写真のうちには、そのものがどのものであるのか、という情報までは含まれてはいないのである。

例を変えて、もう少し具体的に述べてみよう。私たちが、一般的な風景写真を見た時のことを思い起こすのがよい。ここでは、日本の里山の風景を写した写真で考えてみよう。写真のなかには、古民家風の家が何軒か写っており、田んぼも広がっている。田んぼの向こうには、藪で覆われた丘が広がり、その手前には、農機具を入れているのだろうか、木製の物置らしきものが写っている。そしてそこには、何人もの人が農作業をしている様子も写っている。

この写真には、さまざまな個体（一つの家、一つの田んぼ、一つの物置、一人の人などなど）が写っているわけだが、これらは、家というタイプのなかのある一つの家として写っているのである。写真のなかの人々も、それぞれが、農作業に従事する人々というタイプのなかのひとりとして写っているのである。この写真を見る限りでは、私たちは、その家がどの家なのか、その人がどの人なのかまでは、分からない。そのことは、この写真には含まれてはいないからである²⁶⁾。

もし、私が、たまたま偶然にも、写真のなかに写っている人々のうちに私の知人を見出したものとしよう。私は、写真のなかのその人が、自分の知人である（「この人は私の知人だ」、「私の知人が田植えをしている」など）と見なすことができるかもしれない。しかし、その場合であっても、私が自分の知人を同定することができたのは、写真という情報以外に、私がある知人を同定する能力・観念（Idea）を持っていたからであって、写真そのものによっているのではない。

したがって、私たちが実際に、思想を獲得するためには、情報状態において情報を受け取っているだけでは不十分なのである。エヴァンズにおいて、思想は少なくとも、次の二つからの産物でなければならない。「1）情報状態つまり *seemings* と、2）この *seemings* を客観化する能力、すなわち、情報状態のうちの変項を、ラッセル原理に見合うように、対象の根本的な同定を行う観念 *Ideas* と結びつける能力²⁷⁾」とである。

この節を閉じるにあたって、エヴァンズの「情報」という語が関わる諸表現を整理しておこう。主体が、目の前の一つのリングについて「この赤いリングは木の皿の上に乗っている」という思想を獲得した状況で説明してみよう。この時主体は、目の前の世界から情報を受け取っている。そして、主体は、「この赤いリングは木の皿の上に乗っている」という概念的な思想を獲得できるような情報状態にいる、ということができる。

しかし、これはいわば狭い範囲の取り扱いであって、主体は、今日の前に直接広がっている世界からの直接的な情報をのみ受け取っているわけでは決してない。主体は、他者とのコミュニケーションを通して情報を伝達されているし、加えて、自分が直接知覚している情報と他者から間接的に受け取った情報との両者を、自身の記憶能力によって過去から保持しているのである。このような、自身の知覚、記憶、そして他者とのコミュニケーションとからなる情報リンクのうちに主体は存在しており、その時、こうした情報リンクによって培われた、いわば広い情報状態のうちに主体はいるのである。先の「この赤いリングは木の皿の上に乗っている」という思想も、このような広い情報状態に基づいてなされているのである²⁸⁾。

§ 4 エヴァンズの情報概念からの展開

先にも述べたとおり、エヴァンズの提示している情報概念は、一種独特なものである。そうであるが故の曖昧さや欠点というものも確かに指摘できるであろう。しかしながら、そのエヴァンズの情報概念のいわば特異性により、これまでの問題圏 (problématique) の変容ないし新たな展開へと結びつく可能性も伴っているものでもある。この節では、エヴァンズが描く図式から展開されうる興味深い論点について、ごく簡単に二点だけ触れることにしよう。

4-1 知覚でみているもの

上の節 (3-2-3) で触れたことで、エヴァンズの情報概念に関しては、そ

の部分的な文脈の読解においては、命題的な情報と非一命題的な情報との区別が必要ではあるものの、ひとつの統合的な概念としての情報を常に念頭に置くことを忘れてはいけない旨のことを述べた。ここでは、そのことが示唆的となる論点について考えてみよう。

さて、私が犬の散歩にでかけ、遠方の大きな公園まで来たものとしよう。犬を思いっきり遊ばせたい私は、人のいない広めの原っぱか芝生のある広場を探している。少し公園のなかをうろつくと、前方少しいったところに、どうやら芝生が広がっているように見え、しかも人影も見えないようだ。私（と犬？）は喜んで、その芝生に向かって行く。そこで私に見えてきたものは、とても丁寧に刈り込まれた芝生が広がっている広場であった。そこでは、緑色の芝生の絨毯が午後の陽の光を反射していてまぶしくらいである。そしてそこには、立て札が立ててあり、そこに書かれている文字もすぐ私の目に入ってきた。書かれていたその文字は「この芝入るべからず」であった。

この時、芝生に入って遊べなかった私が見ているものは何なのだろうか。私は、目の前の風景から（狭い意味での）情報を受け取っている。ここでの情報は、芝生の緑色のグラデーションや反射した陽の光のまぶしさなど、しばしば非一概念的情報とされる非一命題的なものである。加えて、私は立て札に書かれた文字を認識し、芝生に入って遊ぶことをやめたのであるから、私は命題的な情報、すなわちしばしば概念的情報と呼ばれる情報も確かに受け取っていると言えよう。

このような場合に、情報を、その命題的か否かで区別することにどれだけ意味があることなのだろうか。というよりも、区別することで、むしろ弊害が生じているともみなせるのではないか。私が芝生の風景を見ているのも、そして看板の文字を見ているのも、どちらもともに知覚をしているのであり、どちらも情報を獲得しているのではないか。

哲学において知覚の場面が論じられる際、しばしばそこでは、風景や情景、あるいは鳥の鳴き声、波や風の音などが取り上げられる。このような場合に、私たちに届いている情報は、非一命題的なものであるように確かに思える。加えて述べるに、非一概念的な内容と概念的な内容を巡る議論も、この領域内の事柄のみ念頭に置かれ論じられるに留まっているように思われる。しかしながら、当然のこ

とではあるが、私たちは、言語表現された文も見るのであり、音声も聞くのである²⁹⁾。そこでは、私たちは、命題的なものを直接知覚しているはずなのである。

あるいは、先の芝生の例では、言語的な表現が命令のかたちであったがために、命題的なものには規範的な力があるが、芝生の風景そのものには規範性は働いていない、と考える人もいるかもしれない。しかしながら、そのような二分法もまたやはり単純に過ぎるであろう。例えば、大きなスズメバチが飛んでいる風景は、私たちに「逃げる」や「騒がない」といった行動を呼び起こすもの（「逃げろ」・「騒ぐな」）である³⁰⁾。私たちは、非－命題的なものからも、命題的なものからと同様、規範性を読み取っているのである。それというのも、私たちは、これらのことを情報として同様に受け取っている（集めている・獲得している）からなのである。

エヴァンズにおいては、知覚も記憶も、そしてコミュニケーションも、これらをあわせて、私たちがすでに参入している情報リンクのシステムとして捉え、この中で収集し、保持され、そして伝達されるものとして情報が取り扱われていた。このシステムにおいては、命題的なものも非－命題的なものも同様に情報として考えられているのであった。そして、繰り返すならば、このことは、記憶や伝達の場合はもちろん、知覚においても該当する論点なのである。

4-2 コミュニケーションの新たな実像

もう一点に関しては、情報の同一性に関するエヴァンズの主張をまず見てみることから始めよう。

二つの情報状態（異なる人の状態）は、もし、それらの情報状態が同じ最初の情動的出来事から由来しているのであるならば、たとえ、それら情報状態が同じ内容を持っていないとしても、同じ情報を具現化している、と言えるようにしたい。ある人が、他の人と同様に同じ情報を表象しながらも、様々な仕方であらわされたものを表象するかもしれない。反対に、そして明らかなことだが、二つの情報状態が同じ内容をもっていることでは、それら情報状態が同じ情報の具現化のためには、十分ではない。二つの情報状態が、同じ

情報を具現化している場合には、必然的に、一方が対象 x についてのものであるならば、もう一方もそうである、ということではなければならない³¹⁾。

エヴァンズにおいては、情報は、必ずしも同内容のものが「そのまま」伝えられていくようなものではなく、むしろ、歪められたり、衰微したりもするものである。そこでは、情報状態の同一性は、その内容によるのではなく、情報を産み出した最初の出来事の同一性に、根拠を置いているのである。すると原理的には、内容が相当程度異なっている、最初の出来事が同じであれば、その情報も「同じ」であることが認められるということになる³²⁾。

こうした情報内容の差異は、おそらく思想の差異も産み出しうるものであろう。すると、この論点は、私たちのコミュニケーションの在り方についての（学問的な？）捉え方に関して、その変容を迫るものへと展開していくことが可能なのではないだろうか。

私たちは、コミュニケーションの働きについて、ともすると、同じ思想内容や知識内容が正しく伝えられているかどうか、という観点から考えがちではないだろうか。あるいは、いかに思想の内容が歪曲されるか、改変されるか、といったことが考察の対象にもなるが、このことも「正しい思想内容」というものが念頭にあるからこそ、その正しい内容がいかに正しくないものへと改変されるか、ということの考察となるわけであろう。

しかしながらエヴァンズの図式からは、このようなコミュニケーション像とは違うものが引き出せるのではないか。エヴァンズにおいては、「同一の内容」がそのまま維持されるかたちで、コミュニケーションのリンクを経ていく、というイメージではおそらくない。そうではなくて、コミュニケーションのリンクを経ていくことで、同一の個別者的対象についての情報・思想・知識が蓄積されていく、というものである。蓄積されていく思想には、同内容のものもあれば、内容が異なるものも当然あるだろう。誤情報によって、真ではない情報も含まれることもあるかもしれない³³⁾。しかし、こうした「歪んだ」ものも含めて、様々なリンクを経れば経るほど、その個別者についての「文書の束 (dossier)」が膨らんでいく、というコミュニケーションの働きの捉え方なのである。そして、こ

の捉え方は、私たちの社会におけるコミュニケーションの実情を、実は的確に捉えていると言えるのではないだろうか。

おわりに

エヴァンズの情報概念については、その曖昧さもあり、主題的に取り上げられることの少ない領域である。その曖昧さの理由には、エヴァンズ特有の特徴付けがなされている概念であるから、ということが挙げられるのだが、このエヴァンズの情報概念の特異性は、決して、単に奇をてらったものであったり、極論を導き出すためのものなのではない。むしろ、その情報概念を丁寧に見ていくことによって、私たちの世界についての経験に関して、これまで語られることの少ない軽視されがちな面を開くものなのである。

註

- 1) Bermúdez (2005), p.3.
- 2) 固有名 (proper names) に関しては、固有名というものが記述に還元できるのか、それとも記述とは異なる別の種類の扱いをするべきなのか、という問題がありいろいろ議論があるが、本論文では扱わない。
- 3) フレーゲ、ラッセルなど、より広範な言語哲学的な問題圏における、この問題の紹介に関しては、例えば飯田 (1987) を参照。
- 4) Evans (1982), p.71.
- 5) McDowell (1982/1998), p.204.
- 6) Evans (1982), p.121.
- 7) Evans (1982), p.122, n4.
- 8) Evans (1982), p.121, n1.
- 9) Evans (1982), p.129.
- 10) Evans (1982), p.128, n17.
- 11) Evans (1982), p.128.
- 12) この点についてはミリカンも指摘している。Millikan (2000), Appendix A を参照。
- 13) 主体がもつ思想が、情報に基づいているとは、「情報が思想に染みこんでいる」ことなのである。Evans (1982), p.122 を参照。
- 14) Evans (1982), p.122.

- 15) しかし、ここには簡単に通り過ぎることのできない問題がある。例えば、情報提供者が言語表現を伝達することで、その言語表現を受け取る側に、言語的には表現されていないものが立ち現れ、この言語的ではないもの（非一概念的情報）に基づいて、受け取り側が概念的な思想を有する、ということはあるかもしれない。例えば、学生 A が「この学食のカレーは〇〇店のカレー並に辛い」と学生 B に伝えたものとしよう。学生 B は目の前にある、この学食のカレーを食べてはいないが、見てはいる。そして、学生 B は件の〇〇店のカレーを食べたときの辛さを想い出し、また、〇〇店の辛さが、××店のカレーの辛さと同じぐらいだったことも想い出し、「この学食のカレーは××店のカレー並に辛いわけだ」という思想をもつということが可能かもしれない。あるいは、例えば、ワイン専門家の C が、D に対して「この△△というワインは 2000 年の◇◇と同じような香りがわずかにする」と告げたとする。目の前の△△というワインをまだ飲んではいない D だが、2000 年の◇◇というワインを印象深く飲んだ経験のある D は、その時の複雑な香りを想い出し、目の前のワインについて「このワインは 2000 年の◇◇のようなナッツとバニラを焦がしたような香りがするのだ」という思想を持つことが可能かもしれない。とはいえ、一般的な考えでは（あるいは、一般的な哲学的考えでは）、この場合の事例を、「情報を＜伝達＞している」とはみなさないであろう。学生 A は、学生 B に辛さを、直接実際に（？）伝えているわけではなく、C も D に香りを直接伝えているわけではないからである。ところが、エヴァンズの図式の解釈如何によっては、このようなケースの場合であっても、情報の伝達として許容される可能性がある。そして、これは「共感 (sympathy)」の一類型ともみなせるのかもしれない。
- 16) 知覚の場面で受け取っているようなものを、ある論者は非一概念的内容と呼ぶ。本論文では、非一概念的内容を巡る議論については積極的にには取り扱わない。「非一概念的内容」という表現が出てきたとしても、必ずしも、いわゆる非一概念論者の側に与しているわけではない。
- 17) 前者は、「意味記憶 (semantic memory)」、「事実記憶 (factual memory)」、「命題的記憶 (propositional memory)」と呼ばれることがある。また後者は、「体験的記憶 (experiential memory)」、「知覚記憶 (perceptual memory)」、「個人記憶 (personal memory)」、「エピソード記憶 (episodic memory)」、「自伝的記憶 (autobiographical memory)」などと呼ばれることがある。しかし、それぞれの種類の区分には曖昧な点や線引きの相違があり、一概に同一視することは困難である。
- 18) 先の註においても触れたことだが、この論点は非一概念的内容を巡る議論と関わるものであるが、本論文では扱わない。
- 19) より詳しい議論に関しては、福田 (2004) を参照。
- 20) Evans (1982), pp.122-3.
- 21) Evans (1982), p.123.
- 22) 例えば Bermúdez and Macpherson (1996)。
- 23) Evans (1982), p.124.

- 24) McDowell (1996), p.49 (邦訳 91-2 頁) .
- 25) Evans (1982), p.124.
- 26) 私は、Evans (1982), p.125, n10 の難解な説明を以上のように解釈する。
- 27) Grush (2002), p.4.
- 28) ひとつここでの重要な点を指摘しておく、情報を概念化するのではなく、情報に基づいて (based upon) 概念化の働きがなされるということである。
- 29) 言語的なものを嗅覚で嗅いだり、味覚で味わうということは困難であるように思える (それさえも分からないが)。しかしながら、例えば、点字を読める視覚障害者にとっては、触覚は、非-命題的なものも命題的なものも同様に、情報として知覚する器官であるのかもしれない。
- 30) この点に関しては、エヴァンズも主張する論点である。
- 31) Evans (1982), pp.128-9.
- 32) 紙幅の都合で本論文では取り扱えないが、エヴァンズの描像では、一般的には、逸脱因果 (deviant causation) と見なされる関係に基づく思想であっても、正当に情報に基づいた思想として取り扱うことが十分可能である。このことは、エヴァンズが思い描くコミュニケーションの描像と両立するものであり、興味深い論点である。
- 33) そして、なかには消え行く情報もあるであろう。

参考文献

- Bermúdez, J.L. and Macpherson, F. (1996), “Nonconceptual content and the Nature of Perceptual Experience”, *Electronic Journal of Analytic Philosophy*, http://eprints.gla.ac.uk/584/1/macpherson_ejap.pdf.
- Bermúdez, J.L. [ed.] (2005), *Thought, Reference, and Experience: Themes from the Philosophy of Gareth Evans*, Clarendon Press.
- Evans, G. (1982), *The Varieties of Reference*, Clarendon Press.
- (1985), *Collected Papers*, Clarendon Press.
- 福田 敦史 (2004) 「想起の構成的側面と保持的側面」、『科学基礎論研究』第 101 号 Vol.31, Nos.1,2, pp.17-24.
- Grush, R. (2002), “Rick Grush’s Guide to Gareth Evans’ *The Varieties of Reference*”, <http://mind.ucsd.edu/misc/resources/evans/evansindex.html>.
- 飯田 隆 (1987) 『言語哲学大全 I : 論理と言語』勁草書房.
- McDowell, J. (1982/1998), “Truth-Value Gaps”, *Logic, Methodology and Philosophy of Science* VI, North-Holland Publishing, Jonathan Cohen et al. edited, pp. 299–313, reprinted in his *Meaning, Knowledge & Reality*, Harvard University Press, 1998, pp.199-213.
- (1996), *Mind and World: With a New Introduction*, Harvard University Press (『心と世界』神崎繁・河田健太郎・荒畑靖宏・村井忠康訳、勁草書房、2012 年).
- Millikan, R.G. (2000), *On Clear and Confused Ideas: An Essay about Substance Concepts*,

Cambridge University Press.

小草 泰 (2006) 「直示思想に関するエヴァンズ説の検討」、『科学哲学』39 巻 2 号、
pp.85-100.